



新拠点 「まちの保健室」あわじ

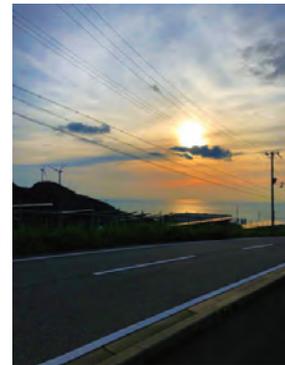
高齢化率が兵庫県で第4位である淡路市で平成30年2月より旧津名地区にあるケアセンターの一室を利用して「まちの保健室」の活動を行っています。開設のきっかけは、近年、独居高齢者や高齢世帯の増加、医療依存度の高い療養者、認知症等様々な疾患を持ちながら、安心して住み慣れた地域で生活している人や家族の相談・支援する居場所が必要と考えたからです。今年度の開設であるため、まだまだ知名度は低いですが、拠点活動や出前隊では、10名程度の参加があり、2～3名のリピーターが参加されます。「認知症サポーターキャラバン」「音楽療法」など、新しい情報の発信や心の癒しになるような活動を心掛けています。

また、地域の在宅支援センターと連携を取りながら、「家族介護者教室」に参加している方々にミニ講話や、健康相談も行っています。

地域住民が気軽に相談や参加ができ、信頼される「まちの保健室」を目指していきたいと思えます。



出前隊 ほくたん「まちの保健室」



北淡地域の阪神間への交通アクセスは充実していますが、地域の交通手段は自家用車が主流です。若者は阪神間に仕事を求め、そのため著しく過疎化が進んでいます。昨年度、淡路市では見守り推進員の活動が終了し、社会福祉協議会職員より、「地域では高齢化により、自分の生活範囲が小さく、いろんな問題を抱え、相談したくてもできない人々がいる。その人たちに寄り添うことは可能ですか」と質問があり「まちの保健室」の在り方を検討する機会となり、本年度より多くの小地域福祉活動に出向く方針に変更しました。

一例ですが、北淡地域では、高齢者の引きこもり予防やフレイル予防の活動している100歳体操を住民主催で実施しています。午後から社会福祉協議会が主催している「井戸端サロン」に「まちの保健室」を組み込みました。

社会福祉協議会職員は「地域包括ケアは医療だけではなく、福祉や行政の連携も必要です。このような活動を知らない人にも伝えつつ、今後は困った人がいれば、次につなげていくネットワーク（仕組みづくり）が求められている」と話されていました。



ボランティア研修 「地域にできるナースたちー地域包括ケアとまちの保健室ー」

東播支部「まちの保健室」は、兵庫県立大学地域ケア開発研究所の拠点協力を受けており、平成30年度もボランティア研修を協賛開催しました。9月16日には県立大学の地域看護学の牛尾裕子先生を講師に招き「地域にできるナースたちー地域包括ケアとまちの保健室ー」をテーマに講演をしていただきました。



講演内容は、「地域包括ケアとは 背景と考え方」「地域で暮らす高齢者 こんな人はいませんか?」「地域包括ケアの要 地域包括支援センター」「地域にできるナースたち」「地域包括における『まちの保健室』の役割」についてです。

その中で「コミュニティナース」の説明があり、今までの看護師は病院や在宅で療養されている方の看護を行うことが基本とされていました。しかし、人口減少と高齢化社会、そして、地域包括ケアを進める中で、医療の知識のある看護師は地域住民に求められており、その関わりが「予防看護」に繋がるとのお話がありました。

私たちが行っている「まちの保健室」は、「阪神・淡路大震災」による被災者の見守り体制、地域社会の整備、自立支援活動への取り組みの一環でした。しかし、震災後20年が過ぎ、当時と現在の社会情勢は大きく変化はしていますが、現在も地域住民は「まちの保健室」を活用しています。「ちょっとした心配事を、普段着の看護師に相談する場があること」が安心して生活することに繋がり、さまざまな関係機関との連携を行い、共に支える関係になっているからだと思います。



今回は淡路市で行っている「まちの保健室」の活動を取り上げましたが、その他の拠点でもさまざまな取り組みを行っています。これからも多職種と連携しながら講演にあった「コミュニティナース」を実践し、地域に根付いた活動を継続していく予定です。

